



Salamander
in
the circle

第十三章

アマセオとカガセオ

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

オモイカネ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える者

フツヌシ・・・・・・・・ 〃

アマセオ・・・・・・・・世界の果ての島の王の兵士 シトリ族の者

カガセオ・・・・・・・・アマセオの弟

チドリ・・・・・・・・アマセオの妻

タマシギ・・・・・・・・シトリ族の者

ホシナ・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長

オマキ・・・・・・・・ホシナの妻

ミツハ・・・・・・・・メッサナからの亡命者 メルノの偽名

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長

ヒューダー・・・・・・・・ 〃 団員

パウル・・・・・・・・ケストル王国・国王

ウルリク・・・・・・・・ 〃 ・第三王子

ヘンリク・・・・・・・・ 〃 ・ヘンリクの息子

ソルド・・・・・・・・ 〃 ・警備隊長

バイスロイ・・・・・・・・黄金門の皇帝の息子

パンテオラ・・・・・・・・メッサナ市の総督

コモラ・・・・・・・・メッサナ総督の顧問
バラム&バランケ・・双子のジャガー。パンテオラの部下
キト・コマ・・・・・・・・ホシナ族の男たち
マミヤ・・・・・・・・ホシナ族の娘
イリチヤ・・・・・・・・火の精霊
ヤスウ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団員
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・・〃・・・・王女
コタエ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官
サノヒコ・・・・・・・・島の王に仕える役人
ハイヤーン・・・・・・・・ネウトラ評議会・本部科学者のリーダー
ティコ・・・・・・・・〃・・・・科学者
パルダリス・・・・・・・・メッサナ市の総督家の一人。総督代理
メンドルプ・・・・・・・・メッサナの化学者
ベネトナシュ・・・・・・・・死神
スクナ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える者
ハマツ・・・・・・・・チドリの父
ヤサカオ・・・・・・・・アマセオの旧友

目次

アマセオとカガセオ

206.

207.

208.

209.

210.

211.

212.

213.

214.

215.

216.

217.

218.

219.

220.

221.

222.

223.

第十三章のあとがき

奥付

アマセオとカガセオ

206.

アマセオは懸命に馬を駆った。原野を超え、山に近づくころになると雲行きが怪しくなってきた。ようやく日が昇り始めるころだったが雨雲が垂れ込めてきて、空を舞うモノノケを目で追うのが難しくなってくる。

彼はただ念じ続ける。わが子を返せと。

ヤサカオから譲り受けた馬はよく駆けた。空を見上げ続けるアマセオの一挙手一足投に答えて、大小の石の転がる河原のような土地だろうが幅のある流れだろうが、まるで意に介さずの駆けようだ。弓矢を預けてきてしまったことは後悔したが、それすら念頭に昇らなくなった。この馬さえいれば、ターゲットを見失うことは決してない。アマセオはそんな気持ちに支配されていた。

だが天候の悪化はいかんともし難かった。風が出てきたかと思うと、みるみる大粒の雨が落ちてきて目に入る。加えて山道の昇りに差し掛かると地面が雨でぬめってくる。ついに馬は急な斜面でぐらりとバランスを崩し、騎乗者も地面に落ちてしまう。馬は初めて悔し気に大きくいなないた。

雨でずぶ濡れになりながら空を見上げるが視界のほとんどは岩が占めている。目の前には断崖絶壁がほぼ垂直にそびえたっているのだった。いかなる障害が立ちはだかろうが、諦めるわけにはいかなかった。わが子を取り戻さねばならない。彼は無言で立ち上がる。この切り立った崖には見覚えがある。険しくそびえた崖だがてっぺんはなだらか

に平坦な森をいただいている。テーブルマウンテンという、変わった地形である。往路でこの山を超えたことを思い出し、馬をなだめて回り道をさがす。この山を越えなければならぬ。彼の試練なのだから。

無心に山道の足場を探しながら、脳裏に浮かぶ面影は、なぜかホシナ族の少女、ミツハだ。なぜなのだとアマセオは訝しむ。なぜ妻のチドリではないのだろう。そして、はたと気がついた。雨。雨のせいだ。私は雨女だと、ミツハは自分で言っていなかったか。

この激しい雨は敵ではない。なんの根拠もないがそんな考えが心中に浮かぶ。敵対し、道を遮るものではない。だから恐れることはない。自分は今正しい道を進んでいる――

ふいに視界が開けた。

207.

そこはクヌギの森だった。山のとっぺんとは思えないなだらかな平坦地に茂る森。直立したごつい幹の上方には葉がうっそうと重なり合い、天井を作っている。そのおかげで、雨はほとんど落ちてこない。そんなクヌギの森の空間に――

――誰だ――

アマセオはぼう然とつぶやく。一本の巨木のかたわらに、人が立っている。シルエットは若い男のように見える。『彼』が放つエネルギーが若い男に見せるのか。猛々しく

滾るような力を感じる。だが武具を携えているように見えない。それどころか——
『彼』は両手になにか抱えていた。柔らかく不安定でかさ張るものだ。それは——

「おぬし——何者か」アマセオは声を押し殺して問うた。頭上で鳥の鳴き声。応じない
『彼』に向かってアマセオはそろそろと足を踏み出す。全身を映す鏡に向かって歩いて
いるようなものとアマセオは思った。そしてさらに問うた。

「おぬしは私か」

その問いに無表情だった『彼』のまなざしがふっと緩んだ。《違うな》、と初めて声
を発する。《おれはあなたではないし、あなたはおれではない》

言葉がアマセオの脳裏に反響する。

《われわれは別々のものだ。兄上》

「おぬしは——私の、弟？」

《ついにこの時が来た。兄上。お会いしとうございました》

208.

「会いたかったと言うか。ならばなぜわが子をさらうようなマネをする」

『彼』は首を振って言った。《こうしなければならなかった》、と。

＊

『彼』の足元には豪華な布がわだかまっていた。いや、『彼』はそれを踏みつけていた。その上に座り込んで胡坐をかき、膝の上に三人の赤子を乗せる。赤子らは目をさましていたがぐずることもなく、じっと『彼』を見上げていた。

「私の三つ子の兄弟はみなこの世にいないと思っていた」

＊

《父は兄上一人を残して二人を処分するおつもりだった。それを任されたのがハマツだった。が、ハマツは気の優しい男だ。ついに赤子の首を絞めたが後悔と罪悪感とで埋葬することができない。赤子の遺体を前に幾日もぼう然としているハマツをみかねてタマシギがおれを埋葬した。その時だ。おれがタマシギにとり憑いたのは……。タマシギは意欲に溢れた若者だった。失意のシトリのあるじの片腕となり、シトリ一門の地位を確立させたかった。その意をくんで、おれはタマシギに憑いた。それは跡継ぎである兄上の力になる一番の方法でもあったからだ》

『彼』の声と言葉は情愛に満ちていて、偽りや謀り、邪な気はまるで感じられなかった。アマセオは胸が熱くなるのを感じた。

「すると……おまえは人ではないのか？」

《おれの肉体は赤子の時に死んだ》

209.

《タマシギはよくやってくれた。おれが靈感を吹き込んだ。跡継ぎであるわれわれがやらねばならなかったことを、おそらく最高の形ですべてやってくれた。しかし、欲が出てきた》

「……それはタマシギが獣毛を扱っていることと関係あるのか？」

『彼』は目をあげてアマセオを見た。

《植物の繊維、蚕の繭、そういったものと、獣毛は、霊性が異なる。植物や蚕とは、人間のために素材を提供するという合意ができていますが、獣はそうではない。獣は自分らの体毛を奪われると感じる。そんなものを繊維にすると、獣の恐怖や恨みがまわりついて濁りが生じるのだ。いずれ、獣との間に信頼関係が築かれればそんなことはなくなるかもしれないが、今はまだ早すぎる。急ぎ過ぎている》

「タマシギは鳥の羽根の織物を王に献上したと……」

これがそれだ。そうやって『彼』は自分が敷いている布を指し示した。近くでよくよくみれば、なんともいえない深い緑の色合い。いったいどうすればこのような色の織物が生まれるのか。見当もつかない色合いである。

《何だと、お思いか》タマシギのような物言いで『彼』は尋ねた。アマセオは正直に首

を振った。わからない。

《キジだ》

「キジの胸毛か!？」

タマシギは鳥の羽根だと言っていたが、キジの翼や尾羽は褐色。こんな色をしていない。ということは抜け落ちた羽根ではなく、胸部の柔らかな毛だ。これだけの大きさの織物にするのに、どれだけのキジに苦痛を与え、あるいは命を犠牲にしたものか——

かつてはキジを狩って遊んだことのあるアマセオだったが、今はぞっと鳥肌がたつのを覚える。アマセオが射止めたキジは後にも先にも、あの一羽だけだ。

210.

シトリのために鳥を犠牲にすることに、なんの問題があるかと、タマシギは言っただけだ。しかしこれは——

「いくらなんでも度がすぎる——お前はタマシギに憑いていたのだろうか？ タマシギのすることを止められなかったのか？」アマセオは途方に暮れて力のこもらない声でそうつぶやいた。

『彼』はしばらく黙っていた。アマセオは己の言葉に気を悪くしたのかと思ったくらいだ。だが、やがて重く口を開く『彼』。

《タマシギには生来、力がある。意志が極めて強く、本人は気づいていないが、呪を使うのだ。己の願望の通りに現実世界を作り替えようとする。その端的な例が、兄上、われわれだ》

「われわれ——」

《タマシギはシトリをもってこの国を支配しようとしている。それが彼の願望だ》

「そんな……バカな……」アマセオは顔を引きつらせて笑おうとした。

《タマシギの願いはシトリをもってこの国を支配することだ。織物界において。それは間違っただけではないとおれは思う。だが彼の本来の性根が——目的のためには手段を選ばぬという、どのような手段を使っても許されるという——思いあがった性根が実に王を生み出したのだ。兄上、それがわれわれだ》

アマセオの顔は引きつった笑いを残したまま凍りついた。

《タマシギの力はおれよりずっと強かったのだ。彼の願望は今も変わっていないことは、二代続いて三つ子が生まれたことに現れている。そして今や自力で獣毛の製品化に成功した。もはや、おれを、靈感を必要とはしていない》

『彼』の沈む気持ちを感じ取ったのか、赤子がぐずり始めた。

211.

「して……その子らをどうするつもりか」

アマセオの問いに『彼』は応える。《三つ子にはふたつの種類がある》、と。

《その一。それぞれの肉体にそれぞれの魂が宿る。その二。ひとつの魂がそれぞれの肉体に宿る。兄上、われわれはその一にあたる。見た目は鏡に映したようにそっくりだが、魂は別々なのだ。そしてこの子らはその二。肉体は三つだが魂はひとつ》

「……………」

《おれが、この子らの肉体をひとつにする。少々、骨の折れるしごとだが……》

「そんなことが可能なのか？ ……もとより、母親のもとで一人しか生き残れぬ宿命ではあるが……」

《ひとつの肉体にひとつの魂。それが本来の姿なのだ。タマシギの願望によって生じた異常を正すまでのこと》

みるみる『彼』の身の輪郭が光を帯びてくる。アマセオは思わず後ずさり、あまりの眩しさに手を眼前にあげて光を遮ろうとした。

だが光は手などおかまいなしにアマセオの意識に入ってくる。これは霊的な光なのだ。アマセオは直観する。目の前で超常の力が開示されているのが肌で感じられる。ほの暗いクヌギの森が光で溢れている。果たして三人の赤子の肉体を一つにするなどということが――

しかしアマセオは『彼』の放つエネルギーに圧倒される。今日この日まで別々に生きてきた兄への思慕、その子らへの思慕。一点の曇りもない純粋な思慕のエネルギー。天地にひとりきりだと思い込んでいたアマセオを兄と呼ぶ存在が、全身全霊をあげて惜しげもなくその目もくらむような高圧のエネルギーを注ぎこんでいる。

それは――『彼』の生命力の枯渇を意味するのではないかと思われた。

アマセオは胸が震えるのを感じながら、つぶやいた。「名もなくこの世を去った私の弟。光り輝く者。兄がおまえを名づける。おまえの名はカガセオである」

212.

どれほど時間が経ったものか。頭上でさえずる鳥の鳴き声で我に返ったアマセオである。見れば——『彼』、いや、カガセオの姿がない。そのかわりにキジの柔毛の織物の上に赤子が——

はっと立ち上がり、アマセオは赤子に駆け寄った。一人しかいない。チドリの傍らで眠っているのを見た時はひ弱に、壊れ物のように見え、抱き上げるのさえためらわれたのを思い出す。しかし今日の前にいる一人は丸々と血色がよく、いかにも健やかである。彼はおそるおそる手を延ばしてわが子を抱き上げた。赤子はつぶらな目でじっと父親を見ていた。

さくっと土を踏む音にアマセオは顔をあげた。その視線の先に、ひとり、男が立っていた。ほっそりとした長身。長い総髪。足元まで隠れる長い、白い装束はマユミノ。麻の繊維を織ったもので、その装束を身に着ける目的は驕りの戒めである。

肩には濃紺の絹布、クヌギの葉からの木漏れ日に金糸の縫い取りがきらめく。面は若々しく、そのまなざしは賢者のものだ。

男はゆっくりと歩み寄ってきて、アマセオの傍らで膝をつき、つと手を延ばし、指先で織物に触れようとしたようだが、思い直したように手を握り締めた。

「みごとなものだ」、と男は言った。たしかに男の声だがまるで銀線が震えるようだ。

艶やかな総髪をとめる白い組みひもの額には金の徴。頬に長いまつ毛の影が落ちてい
る。

アマセオはなにげに惧れを覚えながら問わずにいられない。

「どなたか」

「オモイカネ」、と男は名乗った。「この織物を探していた。逃げられてしまったので
な」

アマセオは記憶を探った。これはタマシギが王に献上したものだ。ということは、こ
の男は王のもとから来たというのか——！

「みごとな出来、みごとな技術だ。ここだけの話、王はたいそう気に入っておられた。
しかし私のような靈感の強い者には触れられなくなかったようだ。強烈な拒絶を現して
私を遠ざけ、あげく、脱走した、というわけだ」

アマセオはただ耳を傾けながら、考えた。この男、オモイカネは弟との会話のすべて
を聴いていたのかもしれない。

「鳥の羽根を織物にする技術はすでに存在する」

アマセオは相手を見た。

「それは一年に及ぶ潔斎の末に行われ、羽根の提供者には極めて篤い謝があげられた。
不純なエネルギーが一切絶たれた中で織られたその織物には生命を呼び育むために使わ
れるという目的があった」

「……………」

「シトリの者よ。そなたらの技術の高さは王も認めるところである。だが提供者との間

に合意のない素材を使用することは、国禁である」

アマセオはごくりとつばを呑み込んだ。「それは——罰せられるということか？」

「このままではシトリにくだされた権利取り上げも検討されるだろう。それほど由々しき行為であるということだ。しかもその証拠品をよりによって王に差し上げるとは」

アマセオは頭を振り、言い訳するようにつぶやいた。

「私は——後継者の身でありながらとうに追放された者です。私にはなにもできない」

213.

タマシギは政庁を訪れていた。王の執政機関である。

役人にはタカミムスビー門の者が多い。シトリもまたその一派で、政庁は親戚の集まりのようなものだった。それぞれ立場が異なるだけで身分の上下などない。言ってみれば、現代人が役場にでも出かけるような感覚であった。

タマシギは、左大臣オモイカネにお目にかかりたいと申し入れた。だが、あいにくその人は自宅から出火したとかで欠勤の届けがされており、たまたま右大臣の部下のひとりが手透きで、「こちらで話を伺おう」ということになった。

「話を伺う」側としては、相手は主流タカミムスビー門に連なるシトリの者、懇切丁寧に耳を傾ける。話す側も相手の丁寧な態度に打ち解ける心地になり、心中に溜めてきた洗いざらいを吐露した。さらに左大臣にも話を通しておくという言質もとりつけ、清々しい気分で帰途についた。

訪問者が部屋を辞すると、右大臣の部下、フツヌシは鷹揚な雰囲気を一変させた。

(鳥の化け物とはいかにも左大臣どの向けの話であるが——シトリのアマセオか——)

その名を聞いたのは初めてではない。すでに幾度も耳にしている。アマセオという男が害獣退治の任務中とはいえ、ホシナ族と接近していることが懸念されていたのだ。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれる者たち。そうでありながら、この国にとってホシナ族はなくてはならない存在であるとフツヌシ自身、よくわかっている。彼らはこの国の食料事情にひじょうに大きくかかわっているのだ。

フツヌシは生来の武人である。その彼が、我ながら柄でもないと思いながら思いを馳せる。

この国は人民の肉食を禁じてきた。人民の肉体は稲の実から十分な栄養が摂れる造りになっているからである。自ら稲を育て、その実りから栄養を摂っていた彼らの肉体は物質としての密度が希薄というか軽いというか、かつて二万年の年月を生きた。しかし、気候が変わった。急激な気温の低下で稲が育たなくなり、人民は飢え、致し方なく害獣として駆逐してきた獣の肉に手を出した。それは思いのほか、というより、稲の実が物足りなく思える美味を備えていて、人民は夢中になって獣を食べた。

その結果、彼らの意識は荒み、犯罪が目に見えて増えた。荒んだのは意識だけではなかった。肉体がみるみる重くなり、老化が早まったのである。かつては二万年あった寿命があつという間に縮まってしまった。ここに至って王は苦渋の決断を迫られることになる。

そこへやって来たのがホシナ族だった。王は彼らに黒曜石の鉱山と、そのふもとの広大な高原地帯にうると菜を栽培する権限とを与えた。うると菜は高栄養だが、高冷の気候と水でしか育たない特性があり、栽培は人民の手には無理だったからである。

こうして、獣肉を食すなら同量のうると菜を摂ることが人民に課せられ、その背後にはホシナ族がいることになったのだった。

(それにしても、鳥を守護神とするシトリが鳥の化け物に襲われるとは、これいかに、であるな)

フツヌシはなんともいえぬ難しい表情で窓の外に目をやった。

214.

「そなたの手の中にあるものは、何か」

「私の子です」

「その子がすべて承知している」

「まさか！　こんな赤子が！」

「そなたの弟がシトリのあるべき姿をその子に吹き込んだ。その子がシトリ中興の祖となろう」

オモイカネがそう告げた時だった。赤子がにっこりと得も言われぬ笑みを見せた。そしてあのキジの羽毛の織物がいきなりふわりと浮き上がった。

「アマセオ、そなたには聞こえぬか……カガセオは、始末をつけに行くと言っておる

ぞ」

*

そのよく晴れた夏の昼下がり。

早朝に起きた火災の鎮火と後始末にごった返すシトリの郷の空がにわかには掻き曇り、ゴロゴロと雷が鳴りだした。ひとしきり雷雨に見舞われ、やがてすっきりと晴れ上がった郷の空にかかる美しい虹に人々が見入っていると主家の母屋から女の悲鳴があがった。

赤子はいつの間にか部屋で寝ていた。さらわれた時のふとんにくるまれて。何事もなかったように。

チドリにはその丸々とした赤子がわが子であるとひとめでわかった。自身が生んだ子である。もろくはかなかった三人の子の面影がひとつに集約されていることもひとめで理解した。むせび泣き、わが子をひしと抱きしめ、頬ずりする。そしてはたと面をあげた。

「ア、アマセオさま……アマセオさま！？ 誰ぞ、アマセオさまを見ませんでしたか！？」

アマセオを見た者は誰もいない。モノノケにさらわれた赤子がどうやって帰ってきたのか、誰にもわからなかった。

215.

「始末をつけに行くとは、どういうことだ！ カガセオ！！」

《知れたこと》、とアマセオの頭の中で声が響いた。《タマシギを誅する》

アマセオの一瞬の逡巡をカガセオは敏感に感じ取った。《タマシギは兄上の子の大きな後ろ盾になってくれると、そうお思いなのだろう。だが彼の持って生まれた性根ばかりはどうにもできん。いずれは災いを招くことになるう》

「……ならば……私も行く」

頭のない鳥の化身は首を横に振った。

《兄上は追放された身。これ以上関わってはならぬ》

「しかし！！」

カガセオは取り合わずに話をかえた。《その子はおれが連れてきたのだから、おれが母親に返す。ついては、名をつけてやってくれ》

言われて赤子を見下ろすと、いつの間にか赤子は脇に立っていたオモイカネのきらめく絹布をじっと見つめ、手を延ばそうとさえしていた。オモイカネはふと目を見開き、己の手を赤子のそばへかざした。赤子はかざされた手のほっそりとした人差し指をおぼつかない握りしめる。

「アマセオ」

「は？」

「この子から、輝く太陽と空を舞う大きな鳥を感じる。そう、陽とワシだ」

「ヒワシ……」と、アマセオ。

「うむ。よい名ではないか。ヒワシよ、みずから母上にそう伝えられるか？」

赤子は声をたてて笑った。できるよ、と言っているようだった。

*

弟のカガセオから実家との関わりを拒否されたアマセオはなにも考えずに往路をたどった。

今となつては無性にホシナ族の人々が懐かしかった。

216.

「アマセオさま！？ アマセオさまじゃないの！！」

頓狂な声をあげて彼を迎えたのは族長夫人のオマキだった。満面の笑顔で両手をひろげ、アマセオを迎え入れようとして自分の手が土にまみれていることに気づいて苦笑いする。ぱんぱん、と威勢よく手を叩いて土を払い落とし、あらためて、「おかえりなさい！！」あけっぴろげでおおらかで、心やさしいひとだ。

彼女の勢いに乗せられて、アマセオも頬を緩ませて、「戻りました」、と返す。

そんな彼をオマキはつくづくとまぶしげな目で見上げる。「アマセオさまは笑ってる時と、そうでない時と、ほんと、別人だねえ！」

「——そうですか？」

「うん。まあ、弓矢かっいできりっとしてる姿はもちろんほれぼれするけどさ、おまえさまの笑顔は女心をとろかすよ。なんでもして差し上げようって気になっちゃうよ」

「そ、それはありがたいが」

ここでしか交わせない会話だとアマセオは思う。故郷の郷ではありえない会話。なにげにほっとした気持ちになりながら、それは己がよそ者である証拠だとも思う。

「さ。今日の仕事は終わり！　うちへおいでな！　男衆が帰ってくる前にいろいろ話を聞かせておくれ！　おーい！　みんなー！　ほら、アマセオさまがお帰りだよー！！」

うると菜の畑で雑草取りをしていた女衆があちこちで顔をあげ、歓声があがった。手を振る者もあった。

217.

「郷のみやげがなにもない。すまん」

ぺこりと頭をさげるアマセオにオマキは、「なにを言ってるの！」叱るような口調で言う。「奥方とお子には会えたんだろ？　それでもこんなに早く戻ってきて……奥方はおすこやかだったかい？　お子はかわいかったかい？　そうかい。うん。話を聞かせてくれなんて言ったけど、それだけ聞けば十分さ。こうやって顔を見せに来てくれただけで十分。ね、皆の衆も、そうだろ？」

女衆の興奮が収まると次は仕事場から帰ってきた男衆の歓迎である。

「なんだあ、一番いい矢じりをつけてやったのに、そのまんまじゃねえですかい。道中、イノシシにもシカにも出くわさなんだってことですかい」

不服そうなキトである。

「ヤサカオの山を通らせてもらったのだ」と言いかけると、

「えっ！ ヤサカオの！？ おれたちもあのでっけえ山に入りてえんだが、あのへんくつなおっさんがなんだかんだ言って入らせてくれねえんだ。なんとアマセオさまはヤサカオさまのお知り合いだったとはー！」

キトが物欲しそうな目をする。

「ヤサカオの八連の山の北側に黒い石の塊があるのは聞いたことがある。そこを見たいのだろう？ 今度、ヤサカオに話してみるよ」

「ほ、ほんとですかい！？ こりゃありがてえ！！」

「いや、期待されてもな。話してみるだけだぞ、ヤサカオは何というかわからんぞ」

「こら、キトよ。アマセオさまを困らせてはならぬ」重々しい声は族長のホシナである。

*

歓迎の儀が終わり、皆が上機嫌で族長の天幕を引き揚げたあと、ホシナが「なあ、アマセオさま」と改まった口調でいう。「考えたんだが、おまえさま、ここの者にならんか」

218.

いきなりのことに驚くアマセオに向かって、ホシナはただでさえ難しい顔をさらに難しくして話し始めた。

「ふもとの水田で稲の不作が続いているような。気候のせいだという。今に始まったこ

とではないのだが、少しずつ、ずっと気温が下がり続けていて、このままでは稲が育たなくなるかもしれんというのだ」

アマセオは衝撃を覚えた。「——そうなのか!？」

「うむ。政庁でもいろいろ試している。稲の種を変えたりな。しかし結果が出るまではやはり時間がかかる。となると、狩猟と動物食、及びうると菜にかかる比重がこれまでより、いっそう、大きくなることが予想される、と。ま、とどのつまり、我々の仕事が増えるというわけだ。おそらく我々ホシナ族だけで石を加工して、狩猟もして、うると菜も作って、というわけにはいかなくなる。さっき、キトが言ってただろ、ヤサカオさまの八連山の黒曜石のこと。我々がその石を使おうというのではない。鉾山の近隣の人々に石の扱い方を伝授しようと考えてのことなのだ」

「————」

「実はもう、この国のあちこちに人を派遣して鉾山のありかを調べている。黒曜石は火山と関係している。火山とは目立つものだから、そうそう難しい話ではないし、ホシナ族は黒曜石に関しては鼻が利く」ホシナはうっそりと笑った。

「では……」からからに乾いてしまった喉を冷水で潤しながらアマセオは言った。「ホシナ族は黒曜石に関する知識と技術を原住の人々に……分け隔てなく、授ける、と……？」

「そういうことだ」

「その、おぬしらは王の直轄地に住んで、特別な仕事を任せられ……つまり、特別な待遇を受けているわけだが……」

「それは……この国の仕組みの中、結果としてそうなったというだけのこと。我々はその日の糧を得、得られたことに感謝し、その日を終わればよい。それしか考えておらん」

「——」

「この国の人々のために生きる。それがホシナ族である。ゆえに星はこの地に我々を留め置かれた」

「——おまえさん——」オマキはすでに何事か決意した様子で、敷物の上に膝をついて、ひたと族長を見た。

「アマセオどの、前にも話したかもしれんが、ワシの娘は今この国におらぬ」

娘はもうすぐ帰ってくるというような話を聞いた気がするが、この国にいない、とは。

「ホシナ族の族長の後継者として育てた男も失ってしまった」

それは初耳だった。

「これは『矢印』だ。ホシナ族は今、曲がり角に立っている」

「……すまぬ、どういう意味か？」

「……様々な事柄が指し示している。この国でのホシナの役目は終わろうとしている、ということだ」

219.

ホシナ族はこの国にふたつとない特権にこだわらない。ただ他者のために、やるべきことをやるだけだ、と、ホシナは言った。

天空を横切っていく細い月を見るときも眺め、アマセオは心がざわざわとさざ波をたてるのを感じる。こんな気持ちは初めてだと、彼は思う。

故郷の織物の郷でいまやその実権を握ろうとしているタマシギの心根に心底がっかりしたあとだった。今宵のホシナの話にアマセオは心が震えた。もはや織物の世界にも武者の世界にも、未練もなければ興味もなかった。自分はホシナ族が好きなのだと思う。彼らといることになんの違和感もなかった。彼らとともに生きることを考えただけで、喜びで胸が震えた。

オマキの傍らに控えたミツハの黒々とした瞳。（不思議な娘だ）清楚で美しく、心ときめくのに、異性に対するものではない。魅力がないというのではない、異性を感じない。なにか——精霊のようだ。

そんなことを思っていた、その時。

アマセオは夜空を何かが動くのを見た。

——鳥？

——こんな夜中に？

はた、と彼は立ち上がった。もしや——

夜空に動くものはふらふらと高度を落としている。そう、ケガをしているような……

アマセオは走った。その落下地点に向かって。あれは——

天幕の中でミツハはあと片付けの手をはっと止めた。外へ出て行ったアマセオに何か異変が生じたのを感じた。体ごと出入口を振り返るミツハのただならぬ様子にホシナは声をかける。「どした？」

220.

この集落の何ヶ所かには夜通しかがり火が焚かれて夜警がついている。獣の襲来を防ぐためだ。だからまったくの真っ暗闇というわけではない。それでもホシナとオマキは松明を片手に、先を走るミツハを追った。集落のはずれに向かっている。

ミツハはいったいどうしたというのか。ホシナとオマキは息を切らせて走りながら目を見交わしあう。やがて……ミツハは立ち止まった。うると菜の畑の入り口。そろそろと膝をついたミツハはそっと声をかけた。

「アマセオさま……？」

「……うむ……」

「それは……ケガをしているのではありませんか？」

「そのようだ」

ようやく追いついたホシナは松明を掲げてそれを照らす。「なんと……ケガ人か？」
「あらまあ！ そりゃたいへん！」 「よし、うちへ運ぼう。ん？ けっこう重いぞ、もうひとり男手が欲しいな。おーい！」 ホシナは手を振り回して近くの夜警を呼んだ。

二本の松明のうち一本はオマキが手にして先頭に立った。ミツハはもう一本を渡され

てしんがりをつとめる。その場を離れようとして彼女は、ぎょっとした。暗がりのなかに人がいる。今まで気づかなかった！

その人はケガ人を運んでいく一行をなんともいえない目で見送っている。そしてミツハと目が合うと、苦笑いのような表情を浮かべて後ずさり、闇の中へ消えた。

221.

カガセオは返り討ちに遭ったのだ。決着をつけに赴いたシトリの郷で。

「なんだと！ 返り討ちとはどういうことだ！！ くわしく話せ！！」

「アマセオさま落ち着いて！ ケガ人をそんなに揺すっちゃだめですってば！」

大の男三人がかりでホシナの天幕に運び込まれたそれは、シカ皮の敷物のうえにぐったりと横たわっていた。見ればただの着物である。しかしその息遣いは荒く、胸のあたりは不規則に上下していた。持ち上げようとすればずっしりと重量感がある。ただの着物であるわけがなかった。

《おれはタマシギがひとりになる時を待っていた。彼の工房の隅で、折りたたまれた織物のふりをしてな。そして、ついにその時が来た。彼はひとりになり、おれに背を向けていた。おれは立ち上がり、彼に覆いかぶさろうと……

その時、タマシギは振り向いた。彼と目が合った。その目は——底なし沼だった。光の無い夜の沼だった。おれはぞっとした。彼は、タマシギは、なにかに取り憑かれてしまったのだ》

「——まさか——」

《おれがタマシギから離れたばかりに、得体の知れない恐ろしいモノが彼に憑いてしまった。おれは、まるっきり太刀打ちできなんだ。這う這うの体で逃げ出すしかできず、それも兄上のところへ逃げ込んでしまったとは——！　なんという不甲斐なさ！　なんという体たらく！！》

「あまりしゃべるな」くわしく話せと言っていながらアマセオはそう言った。カガセオがあまりに辛そうだったからだ。ミツハがカガセオの胸のあたりに手を置いているのを見るともなく見ていた。

《兄上》

「ん？」

《タマシギに憑いているのは、鳥だ。おれは見た。灯火に照らされた彼の背後にできた影を。鳥だった。それも、カラスだ》

もしアマセオが見ていたのがミツハの手ではなく、その顔だったら、彼女が蒼白になったのがわかっただろう。

222.

カガセオの行方を注視していたオモイカネは、彼がシトリの郷で手荒い反撃に遭ったことを知って戦慄した。およそこの世にオモイカネの知らぬものは……ほぼ……ない。だが鳥の化身となったカガセオはそのオモイカネをさえ激しく翻弄するのだ。はっきり

いって、オモイカネの手におえる相手ではなかった。

オモイカネもシトリも元をたどれば祖先を同じくする。同根であるのだから、同じ能力を持っていても不思議ではないと、オモイカネ自身、考えていたのだが、まさか、織物を任せた一派の中からそのような者が現れるとは。アマセオの子ヒワシと触れ合った時、その思いを強くした。そして思った。この能力を負の方向へ向かわせてはならぬと。能力そのものは善でも悪でもない。問題はその使い方なのである。

それにしても、あのカガセオを跳ねつけ、攻撃してきたタマシギは、タマシギにとり憑いたアレは、いったい――

傷ついたカガセオの逃走を助けたのはオモイカネ自身。得体の知れないモノと化したタマシギの前に立ちふさがったのだ。

果たして、それは正しかったのか。

ホシナ族の地に不時着したカガセオはホシナ族によって保護されたのだが、ホシナ族はカガセオに平気で触れていたのだ。

第十三章 『アマセオとカガセオ』

第十四章へ続く

第十三章のあとがき

日本古代史史上、初の落ちこぼれと言われるスクナさまにはツッコミを、最高の賢者と言われるオモイカネさまにはボケを、前回の第十二章で演じていただきました。

で、ちょっと気になってオモイカネさまの地位というのを調べてみた（いまさら？）。そしたら…アマテルの代の左大臣だった。げ。まー、書いちゃったもんはしょうがないので、それならその頃の右大臣は誰か、と調べてみたら、サクラウチ 別名オオヤマスミ（国守の世襲名）でした。

サクラウチはイサナギ・イサナミの時代にウヲヤヲキナ（大老翁）とって、すでに重臣だった。というので、どなたか部下さんを差し出していただこうと思い、フツヌシ氏に登場してもらいました。

『天津神はフツヌシとタケミカツチを派遣し、葦原中国を平定させようとした。その時、二神は「天に悪い神がいます。名をアマツミカボシ、またの名をアメノカガセオといいます」』、と言ったという、フツヌシ。

いやーだけど、（ホツマツタエでは）アマセオはオシホミミの子クシタマホノアカリに随伴してイカルガに下ってるので、葦原中国平定はずーっとずーっと前の話じゃないですかね…ま、時間的には問題ありかもしれませんが、今回の場面では適役かなあと。

そうそう、スクナとコタエは兄と妹で、この兄妹の長兄タカギがオモイカネのお父さん。ついでにオモイカネの奥さんはイサナギ・イサナミの長女ワカ姫。姫さまの方がオモイカネに一目惚れし、詠んで贈ったうたが

『きしいこそ つまおみきわに ことのねの ところにわきみお まつそこいしき』

前から呼んでも後ろから呼んでも同じ音のうたで、周り歌といい、自己完結の堂々巡りで変化・進展を起さない。受けた方は返すことができないうたなのだそうです。まあ、つかまってしまった、というか。

オモイカネさまはどうも、相当いい男だったらしいです。

2022年11月22日 記

奥付

Salamander in the circle

第十三章 アマセオとカガセオ

2022年11月30日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

[「素材ラボ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
